

ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。

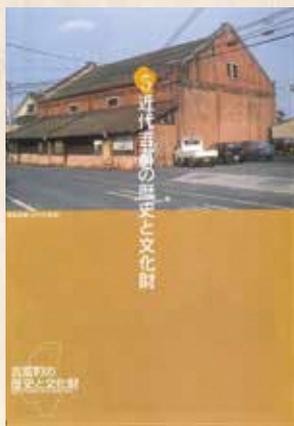


山国橋

第23回 ^{れんが} こんなところにも？ 町に息づく「煉瓦」

「煉瓦」その伝統と景観美

みなさん、「煉瓦」と言えば何を思い浮かべますか？「暖炉」「レトロな建物」「外国のお城」などのイメージでしょうか。国内の建物では、東京駅や横浜の赤レンガ倉庫などが有名ですね。近隣では、北九州市の門司赤煉瓦プレイスや中津市宮島のリルドリームなど、大正～昭和初期に建築された煉瓦の建造物が現役で活用されています。吉富町にも、大正9年に建てられた赤煉瓦の倉庫がありました。農協吉富支店横にあった「農業倉庫」です。老朽化のため平成17年に取り壊されましたが、その美しいたたずまいを記憶されている方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。



町文化財冊子に掲載されている農業倉庫

れる赤土を原料に煉瓦の製造を行っていたそうですが、設立当初の予想に反して需要が伸びず、廃業に至りました。廃業後も煙突のみが工場跡地に長く残っていたそうです。

生活に密着した煉瓦

鉄筋コンクリートが建築材料の主流となった現在では、煉瓦を使った建造物を目にする機会は少なくなっています。しかし、煉瓦は今も私たちの暮らしの随所で活躍しています。町内で一番馴染み深いのは、やはり山国橋の橋脚でしょう。県境を挟んで異なる意匠が施され、建設から80年以上建った今でも古さを全く感じさせず、どっしりと重厚感があります。また、佐井川に架かるJR鉄橋の橋脚も煉瓦できており、遠くから川面に映る美しい様子を見ることができます。さらに、その鉄橋の西側、鉄道と町道が立体交差する中学校裏の煉瓦トンネルは、町内で最も間近で煉瓦を堪能できるスポットです。JR日豊本線の前身・豊州鉄道時代の明治30年頃に建築されたものと推定され、補修を繰り返しながら今も現役でレールを支えています。

再開発事業や橋梁の架け替えなどによって煉瓦の建物やトンネルなどが消滅するケースもあり、今後煉瓦の建造物は減少の一途を辿ると思われます。私たちの日常の一部となっている光景も、実は貴重なものなのかも知れませんね。

幻の煉瓦工場

その昔、町内には煉瓦を製造する工場も存在していました。大正8年、現在の北九州市城野の企業家・山崎幸三郎氏が「煉瓦製造に適地である」と吉富在住の知人に話をもちかけ、当時の東吉富村長であった矢頭軍司氏も加わり「吉富窯業株式会社」を立ち上げました。工場は今吉に建設され、別府や楡生から算出さ



佐井川JR鉄橋の橋脚



中学校裏の煉瓦トンネル